

## ニーチェの道德批判について

林 進

### 一、「道德こそ危険の中の危険ではないのか」

道德はニーチェから批判の対象となった。ニーチェの著書の表題「善悪の彼岸」がそれを明示している。当代の支配的道德を受け容れるべきかどうか、そもそも道德そのものを受け容れるべきかどうか——ニーチェが、「善悪の彼岸」刊行の翌一八八七年、同じく反道德的な著書『道德の系譜学』の序言で、「我々は道德の諸価値の批判を必要とする」とか、「道德の諸価値の価値そのものがまず問われなければならない」（5-253 序言6）と述べるのは、それまでずっと、道德あるいは「道德の諸価値」が、「所与として、事実として、すべての疑問を越えたものとして受け取られてきた」（同上）からである。少なくともニーチェはそう考えた。しかしその「道德の諸価値」を批判するためには、その前にまずは「道德の諸価値を発生させ、発展させ、変化させてきたさまざまな条件と事情」（同

上）を知らなくてはならない。ニーチェは、道德にはそれぞれ非道德的なものも含めてさまざまな起源と歴史があること、道德は社会によってまったく異なること、道德は不変の、普通の、永遠の価値などでは決してないことを主張する。ニーチェから見れば、道德の歴史とは、人間の理性や自由意志に導かれた発展プロセスなどでは全然なく、人間が動物的な状態から道德的存在に変容する「道德化」の歴史、言いかえれば、道德が暴力と残虐に発していることを消し去るという意味での道德化の歴史なのである。

ニーチェの基本的な方法論は「系譜学」である。系譜学的方法を適用し、道德の起源とその歴史をたどる。この方法は、『悲劇の誕生』でギリシャ悲劇の起源を探り、その完璧なアポロ的な芸術形式の奥底にディオニュソスの混沌を見出したときにすでに実践されていた。『道德の系譜学』では、ニーチェは、道德の隠された非道德的な起源と歴史を暴露することによって、人間が生まれながらの道德的存在などでは決してないことを明らかにする。ニーチェは、道

徳を含めたあらゆる歴史の起源と目的との間には、発生の原因と結果との間には「天と地ほど」の隔絶があると考えるのである。

あらゆる種類の歴史にとつて、次の命題よりも重要な命題は断じて存在しない。(中略)——その命題とは、すなわち、ある事物の発生の原因と、その最終的効用、その実際的使用、その目的体系への組み込みとのあいだには、天と地ほどの距離があるということである。(5-313 第二論文12)

そもそも道徳は、特定の集団の利害によつて、また特定の人間の心理によつても左右される。それゆえ道徳の起源を、個々の道徳の歴史的起源と心理的起源を探求し、それらの道徳を生みだした歴史的状況と心理的状況を追究することによつて、道徳の出自を、とりわけ近代の善悪の道徳について、その出自を明かさなくてはならない。「人間はいかなる条件のもとに善悪という価値判断を考案したのか」(5-249 f 序言6)。ニーチェは自ら「インモラリスト(反道徳家)」(5-162 『善悪の彼岸』226番)を名乗り、善悪の彼岸に位置する道徳論を展開し、近代の道徳を「仮面として、偽善として、病氣として」(5-253 序言6) 診断し、それがどんなに人間の生を抑圧し矮小化してきたかを説明する。いわゆる「善人」を否定し、いわゆる「道徳」を否定し、自分が通常の意味での道徳家ではないことを表明する。

結局、私の使用する反道徳家という語が含んでいるのは、二つの否定である。私は一方でこれまで最高のタイプと見なされてきた人間、善人・善意の人・善行の人を否定する。他方で道徳自体として通用し支配してきた類の道徳を否定する——デカダンス道徳を、はつきりいえば、キリスト教道徳を否定する。(6-367 f 「い」の人を見よ)「なぜ私は一個の運命なのか」

ニーチェは近代道徳(キリスト教道徳)を、「奴隷道徳」とか「畜群道徳」(5-123 『善悪の彼岸』201番)と呼んで、「非利己主義的なものの価値」、「同情本能や自己否定本能や自己犠牲本能の価値」(5-252 序言5)を疑問視する。この近代道徳の利他主義に、「終末の始まりを、停滞を、過去を振り返る疲労を、生に反抗する意志を、やさしく憂鬱に姿をあらわす最後の病気を」(5-252 序言5) 見たからである。ニーチェは「善人」を「悪人」よりも価値を高く見積もること」について、「しかしどうであろうか、もしもその逆が真であるとしたら」(5-253 序言9) というふうに言つて、「善人」の価値を問い直し、さらには「道徳こそ危険の中の危険ではないのか」と言つて、善悪の道徳の価値を問い直す。

「善人」にも退化の兆候があるとしたら、どうであろうか？  
同じように危険、誘惑、毒、麻酔剤が「善人」のうちに含まれていて、それらのおかげで、現在が未来を犠牲にしながら生き

のびているとしたら。おそらくそのほうがより快適でより安全であろうが、しかし、人間の型はより小さくなり、より下劣になっ  
ていっているのではないか？……（中略）それがまさに道徳のせ  
いだとしたら、（中略）そうだとしたら、道徳こそ危険の中の  
危険ではないのか？……（5-252 序言6）

## 二、ルサンチマンからの道徳の誕生

### ——史上最大の復讐劇「ローマ対ユダヤ」

主人道徳（貴族道徳）と奴隷道徳（畜群道徳）、これらは、ニ  
ーチェによれば、これまで地上を支配してきた道徳の「二つの根本  
型」（5-208『善悪の彼岸』260番）である。主人道徳（貴族道徳）  
が第一型で、この道徳型の担い手は貴族階級であった。ニーチェは  
貴族的種族として「ローマの、アラビアの、ゲルマンの、日本の貴  
族、ホメロスの英雄、スカンディナヴィア海賊」（5-275 第一論文  
11）を挙げるが、しかしニーチェによれば、「貴族階級は当初は常  
に野蛮階級であった」（5-206『善悪の彼岸』257番）。彼らは「あ  
らゆる社会的拘束から自由」（5-274 第一論文11）で、「獲物と勝  
利を貪欲にねらって徘徊する金髪、の野獣」（5-273 第一論文11）で  
あった。この野蛮人が、新参の征服者として現れ、軟弱な平和ボケ  
した文化人を襲撃し、貴族となったのである。

われわれは、これまであらゆる高度の文化がどのようにして地  
上に始まったかを容赦するところなく言おう！ なお自然のま  
まの本性をもつ人間が、およそ言葉の恐るべき意味における野  
蛮人が、なお挫かれざる意志力と権力欲を有した掠奪人が、よ  
り弱い、より開化し、より平和的な、おそらく商業あるいは牧  
畜を営む人種に、あるいは、まさに最後の生命力が、精神と頹  
廢のきらきらした花火のように燃え尽きようとしている古い老  
熟した文化に襲いかかったのである。（5-206『善悪の彼岸』  
267番）

たとい文化的になろうとも、軟弱化して腐敗すれば、つまり  
「人間」という型を高める」（5-205『善悪の彼岸』257番）とい  
う志を失えば、他の野蛮さを保持した集団に取って代わられる、と  
いうわけである。しかし、ニーチェがとりわけ古代ギリシア・ロー  
マに典型を見た主人道徳（貴族道徳）は、あるとき、道徳の第二の  
型である奴隷道徳（畜群道徳）すなわちキリスト教道徳に取って代  
わられた。これは道徳の歴史における決定的瞬間であり革命的出来  
事である。少なくともニーチェはそうとらえた。『道徳の系譜学』  
は、「貴族道徳」から「奴隷道徳」へ推移するこの歴史的瞬間を明  
らかにする。

貴族道徳は奴隷道徳にどのようにして取って代わられたのか。古  
代ギリシア・ローマの貴族道徳はユダヤ教の遺産を継いだキリスト

教の奴隷道徳へ道を譲ったのであるが、ニーチェは、貴族道徳と奴隷道徳との対立を「ローマ対ユダヤ」(5-286 第一論文16)と称した。この「ローマ対ユダヤ」の戦いは、4世紀末にローマ帝国がそれまで迫害していたキリスト教を公認し国教にしたことによって、政治的には支配されていたユダヤの側が勝利した。このユダヤ・キリスト教の勝利を、ニーチェは、被征服民族が征服民族に対して起こした「道徳上の奴隷一揆」(6-117「善悪の彼岸」195番)と呼んだ。そしてこれこそ、ニーチェによれば、二千年に及ぶユダヤ人の復讐の長期計画の実現、すなわち、ユダヤ人を裏切る敵役を演じるイエスという最高のヒーローを得ることによって、世界を心酔させることになる史上最大の悲劇的大芝居だったのである。

愛の福音の化身としてのこのナザレのイエス、貧しき者、病める者、罪ある者に至福と勝利とをもたらすこの「救世主」——彼こそは最も不気味な、最も抵抗しがたい形の誘惑ではなかったか。あのユダヤ的な価値と理想の革新への誘惑と迂回路ではなかったか。この「救世主」、このイスラエルの疑似敵対者、似非解体者という迂回路をたどってこそ、イスラエルはその崇高な復讐欲の最後の目標に到達したのではなかったか。「全世界」すなわちイスラエルのすべての敵が、一も二もなくこの餌に食いつくことができるために、イスラエル自らが全世界の面前で自己の復讐の真の手先をまるで不倶戴天の仇敵かなんぞの

ように否定して十字架に掛けなければならなかったのであるが、この一幕こそは真に偉大な復讐の術策、すなわち先を見通し、地下に潜り、あらかじめ計算し、おもむろに手を伸ばす復讐の秘密の黒魔術だったのでないか。(6-268 f 第一論文8)

鍵となる概念は「ルサンチマン」である。ルサンチマンは、ニーチェの定義によれば、「本来の反応つまり行為による反応が拒まれている」、殴り返せない、暴力で反抗できないときに生じる憎悪や怨恨を、「想像だけの復讐によってその埋め合わせをする」(5-270 第一論文10) 心的態度である。ニーチェは言う、「キリスト教はルサンチマンの精神から生まれたものであって、一般に信じられているように『精霊』から生まれたのではない」(6-352「この人を見よ」『道徳の系譜学 論争の書』)と。つまりキリスト教道徳＝近代道徳＝奴隷道徳は「無力者の内攻した憎悪と復讐」(5-271 第一論文10) すなわちルサンチマンから生まれた。しかし、ルサンチマンがたんなる憎悪や復讐だけなら問題にならない。問題になるのは、「理想を創り、価値を創り換える憎悪」(5-268 第一論文8)、すなわち「ルサンチマン、そのものが創造的になって価値を産み出す」(5-270 第一論文10) ときである。「道徳上の奴隷一揆が始まる」(同上) のはこのときである。ニーチェは、ルサンチマンの「創造的行為」(5-271 第一論文10)、ルサンチマンを原動力にしたキリスト教の新たな価値創造、世界解釈の力、価値転換の力に注目す

る。今や天国に行ける、行けないという基準が設定され、強力で富裕な者に悪のレッテルが貼られる一方、貧しく病める弱者は天国へ行くべき善き者とみなされた。単に強者を嫉むのではなく、神の國、天国という強力な価値を創造した。このキリスト教道徳の出現を、ニーチェはルサンチマンの完璧な勝利とみなす。ルサンチマンからの新しい道徳、奴隷道徳の誕生である。

これによって、「優劣」の道徳から「善悪」の道徳への転換、道徳の価値基準の転倒が生じた。今や高貴な者・支配者は、ルサンチマンの眼差しによって変色され、意味を変えられ、逆の見方をされ「悪」になり(5-274第一論文11)、貴族道徳における「よい」と「わるい」は転倒してそれぞれ奴隷道徳における「わるい」と「よい」となった。

あのユダヤ人たちこそは、恐るべき一貫性をもって貴族的価値方程式(よい⇨高貴な⇨強力な⇨美しい⇨幸福な⇨神に愛される)に対する転倒を敢行し、最も深い憎悪の(無力の憎悪の)萌芽しりをしながらこの転倒を固持したのである。(5-267第

一論文7)

### 三、「優劣」と「善悪」の道徳

——「よい」も「わるい」もいろいろ

ニーチェは近代の「善悪」の道徳⇨奴隷道徳とは別の由来をもつ「優劣」の道徳⇨貴族道徳を発見した。貴族道徳の価値尺度は「優・劣」、すなわち「優良(gut)」と「劣悪(schlecht)」である。これに対し、奴隷道徳の価値尺度は「善・悪」、すなわち「善良(gut)」と「邪悪(böse)」である。貴族道徳から奴隷道徳へ移行することによって、価値尺度も「優・劣」から「善・悪」へ移行した。「よい(gut)」はもともと「優良」という意味で、その反対語「わるい(schlecht)」は「劣悪」を意味した。この「よ」と「わるい」を、まずは高貴な人間が身分的な意味で使い、自身とその行為は「優良」、他の身分の低い人間とその行為は「劣悪」とした。しかしこの身分的な意味で使われた「よい」「わるい」はしだいに精神的な意味に変化していった。

どの言語にあっても、身分上の意味での「高貴な」とか「貴族的な」というのが基本概念であって、そこから「精神的に高貴」で「貴族的」という意味で、また「精神的に高潔な」「精神的に特権をもつ」という意味で、「よ」と「わるい」という語が必然的に発展してきた。この発展は、「卑俗な」とか「賤民的」

とか「下層の」という語を「わるい (schlecht)」という概念に移行させるもう一つの発展とつねに並走してきた。(5-261 第一論文4)

ところが、あるときから、すなわち、ニーチェのいう「道德の奴隸一揆」の勝利の時点から、この「よい」が「優良」から「善良」の意味に移行した。それと並行して「わるい」が「劣悪」から「邪悪」の意味に移行した。ドイツ語の schlecht (劣悪) はもともと schlicht (素朴) と同語で、よこしまなところがない、横目を使ったりしない、を意味し、「たんに貴族に對立しているだけ」の「素朴な平民」を指す言葉であった(5-261 第一論文4)。

二つの一見同一の「よさ (gut)」という概念に對置された「劣悪 (schlecht)」と「邪悪 (böse)」と二つの言葉が何と異なっていることか——しかし、その「よい」も同一の概念ではないのである。(5-274 第一論文11)

道德における価値決定には二通りある。一つは、自らを「よい」と感じてから「わるい」という価値を導く貴族道德の能動的な価値決定である。もう一つは、敵対する者を「わるい」と感じてから自らを「よい」とする奴隸道德の反動的な価値決定である。両者では価値定立の方向が正反対で、一方ではまず自己肯定があり、他方では

はまず他者の否定がある。

一つ目の貴族道德においては「よい (優良)」が第一義的概念で、「高貴な者」自らを指し、「高貴」を意味する。すなわち勇氣、肉体的および精神的な強さ、自尊心といった貴族の性質を備えていることを意味する。高貴な人間は、自己肯定の感覚と自分の価値尺度をもっており、他者の価値基準に左右されない。「高貴な種類の人間は、自分を価値決定者と感ずる。この種の人間は自分が是認されることを必要としない」(5-209 『善悪の彼岸』260番)。同時に、いわゆる「距離のバトス」から自分とは反対の者のあり方の卑しさを「わるい (劣悪)」と直感する。それゆえ、貴族の人間にとっては、「わるい (劣悪)」は、高貴な性質に欠ける者を意味する副次的概念として、「一つの模造品、付録、補色」(5-274 第一論文11)にすぎない。

高貴な人々、強力な人々、高位の人々、氣高い人々は、自分たち自身および自分たちの行為を「よい」と感じ、つまり第一級のものとして、これをすべての低級な者、低劣な心持の者、卑俗な者、賤民的な者に對置した。この距離のバトスから、彼らは初めて、価値を創造し価値の名を刻印する権利を獲得した。(中略) 高位の支配的種族が低位の種族、「下層者」と比較してもつ永続的で支配的な全体感情と根本感情——これが「よい」と「わるい」の對立の起源である。(5-259 第一論文2)

もう一つの「善悪」の奴隷道徳においては、「わるい(邪悪)」が第一義的で、「よい(善良)」は副次的である。奴隷道徳の「善悪」は貴族道徳の「優劣」とはまったく別の起源をもつ。ルサンチマンに基づく奴隷道徳は、他のものに対する否定から出発した。したがって「奴隷道徳の行動は根本的に反動である」(5-271 第一論文10)。貴族道徳が自己肯定から出発してから他者を否定するのに対し、奴隷道徳は自己の上位に立つ人間を否定してから自己を肯定する。ルサンチマンの奴隷的人間はまず上位の人間を悪人と決めつけ、ついで自己を善人とする。貴族道徳が自立的なアクションであるのに対し、奴隷道徳は派生的なアクションである。ニーチェはルサンチマンの人間を猛禽に襲われる仔羊たちにとえる。仔羊たちは「これらの猛禽は悪い。だから猛禽とできるだけかけ離れた者、むしろ猛禽の反対の者、すなわち仔羊こそ——善いのではあるまいか」(5-279 第一論文13)と結論づける。自分たち仔羊は、悪い猛禽類の反対色なのだから善いのである。今や弱者の子羊は善となり、強者の猛禽は悪となった。ようするに、ルサンチマンの人間は、仔羊たちと同様、まず「悪人」を思い描き、それと対比して弱い自分を「善人」と見なすのである。

ルサンチマンの人間が思い描く「敵」を想像してみるがよい、——そこにこそ彼の行為があり、彼の創造がある。彼はまず「邪悪な敵」、「悪人」を心に思い描く。しかもこれを基礎概念

として、そこからその残像ならびに対照像としてさらに「善人」を考えだす、——それが彼自身というわけだ！(5-273 f 第一論文10)

#### 四、「負い目」と「負債」

——罪も罰も経済的関係に起源をもつ

ニーチェは、「負い目(罪)』(Schuld) という道徳上の主要概念は「負債(借金)』(Schulden) というきわめて物質的な概念に由来する」(5-297 第二論文4) こと、すなわち道徳的関係が「売り手と買い手」の経済的関係に由来することを指摘する。

負い目とか個人的責務という感情は、(中略) その起源を、存在するかぎりの最も古い最も原初的な対人関係のうちに、すなわち、買い手と売り手、債権者と債務者との関係のうちにもつている。(5-305 f 第二論文8)。

債務者は、契約を破れば、すなわち負債(借金)を返すことができなければ、それが過失であろうとなかろうと、「破壊者」として、犯罪者となり罰せられる(5-307 第二論文9)。ただし、ニーチェによれば、刑罰は罪の上に成り立つとか、刑罰を受けるのはその人間に罪・責任があるからだというのは近代の考え方である。「刑罰

は、意志の自由もしくは不自由についてのあらゆる前提から全く離れ、報復として発展してきたのである」(5-297 第二論文4)。道徳的逸脱行為に対する返答は刑罰、かつ、その刑罰は正義によるものだとする考えは、きわめて後になって人間が手に入れたものである。刑罰は、もつと原始的な心理的起源をもつていて、傷つけた者を傷つけたいという欲求から、あるいは加害者に対して発せられる「怒り」の感情から行われたのである。罰とは、行為や行為の意図に対する道徳的判断の実行ではなく、弱者に対する強者の力の原始的行使であつたということである。

人間歴史のきわめて長い期間を通じて、悪事の首謀者にその行為の責任を負わせるという理由から刑罰が加えられることはなかつたし、したがって責任者のみが罰せられるべきだという前提のもとに刑罰が行われたこともなかつた。——むしろ、今でもなお親が自分たちの子供を罰するときのように、加害者に対して発せられる損害を受けたことへの怒りから刑罰は行われたのである(5-298 第二論文4)。

この「怒り」はやがて、「どんな損害にもどこかにその等価物がある」「賠償支払いが可能である」という考えのもとに、抑制され、変化を受ける(同上)。つまり刑罰は、「苦痛」を「加害者に与える」という「損害と苦痛との等価」という思想」(同上)から行わ

れるようになる。この思想の起源は、罪の場合と同じく、「債権者と債務者との間の契約関係」のうちにある。「この契約関係は、およそ『法的主体』なるものの存在と同じように古く、帰せるところは売買、交換、交易の根本形式にほかならないのである」(同上)

そもそも売買や交換の取引が可能となるためには、債務者は支払いの約束を守らなければならない。もしも、債務者が借金を返すことができない場合には、かつては「債権者がありとあらゆる侮辱や責め苦を債務者の身体に加えることができた。たとえば負債に相当すると思えるだけの肉を切り取ることができた」(5-299 第二論文5)。ここはシェイクスピアの『ヴェニス商人』の有名な場面を髣髴とさせる。商人シャイロックが、借金を返済できないアントニオに代償として一ポンドの肉を切り取る権利を要求する場面である。ニーチェはここで「この(経済的)補償形式全体の論理」、すなわち債権者の権力感覚を増大させる論理を説明する。つまり債権者は、債務者に苦痛を与える権利を行使することによって、「主人権」を得るのである。これは債権者にとって「一種の快感」、「自分の力を非力な者の上に何の躊躇もなく放出できるという快感」(5-299 第二論文5)となる。経済的損害を被った人間は、その加害者を虐待し苦しめることに積極的な喜びを見出すのである。刑罰は、単なる「報復」以上のものとなり、「権力」の性格を持ちはじめた。



債権者は債務者に「刑罰」を加えることによって一種の「主人権」に参与する。ついに彼もまた、人を「目下」として軽蔑し虐待できるといふ優越感に到達する——あるいは少なくとも、実際の刑罰権、すなわち行刑がすでに「お上」の手に移っている場合には、人が軽蔑され虐待されるのを見る、という優越感に到達する。(5-300 第二論文5)

しかしこの罪と罰の経済的起源は、「人間の内面化」(5-322 第二論文16) すなわち人間の道德化が生じるとともに隠され、債権者と負債者との経済的關係が、道德的解釈によつて置き換えられた。ところで、ニーチェによれば、人間は、本能に支配された動物から、「自分の本能のいっさいを恥じることを学び」(5-302 第二論文7)、自らの行為に対して責任を取り、契約を守る道德的存在へと進化した。これは、動物的本能に「慣習の道德」と「社会的な拘束服」を身に着けさせることではじめて可能になった(5-303 第二論文2)、すなわち、最も苛酷で残酷な刑罰を用いて人間の本能を飼ひ慣らし支配することによつて可能になった(5-295 f 第二論文3)。しかし、刑罰は有罪者に「良心の呵責」を生じさせはしない、とニーチェは言う。

真の良心の呵責は犯罪者や受刑者おいてはきわめてまれなことである。監獄や刑務所は良心をかじるこの種の虫が好んで繁殖

する温床ではない。(中略) 大まかに言うと、刑罰は人を無情にし、冷酷にする。一つのことを思いつめさせる。疎外感を激化し、反抗力を強める。(5-319 第二論文14)。

つまりニーチェは、刑罰による犯罪者の更正や善良化を否定する。刑罰は、人間に「恐怖心の増大」をもたらして人間を「手なづけ」はしても、人間を「より善く」はしない、ということである。

人間の場合でも動物の場合でも、大体において刑罰によつて達成されるものは、恐怖心の増大、悪賢さの助長、欲望の制御である。してみれば、刑罰は人間を手なづけはしても、人間を「より善く」はしない——その反対だと主張するほうがずっと正しいだろう。(5-321 第二論文15)

五、「やましい良心」は渴望する

——「もつと苦痛を！」

「外へ向けて放出されないすべての本能は内へ向けられる——私

が人間の内面化と呼ぶところのものはこれである」(5-322 第二論文16) とニーチェは言う。もともと人間は、本能的に自分の力を振るつて相手に苦痛を与え、それによつて快楽を得てきた。しかし道徳化と社会化が進むなかで、他人を虐待したいという欲望が阻止さ

れたとき、外へ発散できない本能は内へ向かった。道德概念の一つの「良心」も、もとは外へ向かう「支配的**本能**」(5-294 第二論文2)であった。しかも「それは、残虐性の**本能**であつて、もはや外へ向けて放電できなくなつたので、逆方向の内へ向かつたのである。」つまり「良心は、一般に信じられているように、『人間のうちなる神の**声**』ではないのである。」(6-352 『この人を見よ』「道德の系譜学 論争の書」)

「やましい良心」とは、ニーチェによれば、外向きの「良心」が内向きに方向転換させられた負の良心、欲求不満に陥つた良心、「無理矢理に潜伏的にされた自由の**本能**」である。「この押し戻され、引きこもり、内向し、そしてついにはただ自己自らに向かつてしか爆発し発散されなくなつた自由の**本能**、これが、これだけがやましい良心の始源なのだ」(5-325 第二論文17)。こうして人間の心に負の感情、負い目、罪の意識が植え付けられた。本来の「良心」は自負心に支えられた、「自己を保証しうる、しかも誇りをもつて、したがつてまた自己に対して然りと、言いうる」(5-294 第二論文3)。自己肯定的感情であるが、これに対し「やましい良心」は、負の感情、自己否定的感情、言いかえれば、負い目、罪悪感に支えられた良心ということになる。ニーチェはこの「やましい良心」を、「深い病氣」(5-321 第二論文16)、「醜悪な植物」(5-325 第二論文17)、「陰密な自己への暴力」、「自己虐待の意志」(5-326 第二論文18)、「債務意識」(5-329 第二論文19)等とも称している。

る。

では「良心」を「やましい良心」にしたのはだれか。ニーチェによれば、それは「ルサンチマンの人間だ！」(5-311 第二論文11)、いわゆる禁欲的な精神的人間で、僧侶や学者や教師や哲学者などであるが、代表格は禁欲僧である。彼らは、「私は苦しんでいます。これは誰かのせいにはちがいません」と訴えてくる者に対して、「その誰かというのは、お前自身のことなのだ」(5-375 第三論文15)と吹き込む。これによって、外に出ようとする苦しみの感情は封じ込められ内攻させられる。感情のこの方向転換によって人間の内部には負の感情、負い目の意識が植え付けられ、「やましい良心」(良心のやましさ)が生まれる。これによって苦しみの原因は苦しむ者に罪があるからだと解釈され、この罪の意識をめぐつて感情は自虐的になり、心的刑罰状態をつくりあげ、心の病となり、ついには救済を求め、というわけである。

禁欲的な精神的人間、とりわけ禁欲僧は、「力への意志のルサンチマン」(5-363 第三論文11)から「苦しみ」を渴望する。なぜなら「苦しんでいる者に対する支配が彼の王国である」(5-372 第三論文15)から。不幸な者、苦しんでいる者は、禁欲僧から苦しみの原因を教示される。禁欲僧は、「お前は自分の苦しみの原因を自身自身の中に、負い目のうちに、過去の「コマのうちに求むべきだ、お前は自分の苦しみのものを一つの刑罰状態と理解すべきだ」と言つて、まさに「苦しんでいる者」を「罪人」にし、その

「負い、目感情を利用」して救済を約束する(5-389 第三論文20)。今や苦しみが「秘密の救済装置」(5-394 第二論文7)となった。自分の苦しみに意味が与えられたのである。問題なのは、苦しみそのものではない。「何のために苦しむのか」という問いの叫びに対する答えが欠如していた(5-411 第三論文28)のである。「苦しみに対して人を憤激させるのは、苦しみそのものではなく、苦しみの無意味さである」(5-394 第二論文7)。しかし今や苦しみに意味が、目的が与えられたのである。

人間、このもつとも勇敢で苦惱に慣れた動物は、苦しみそのものを拒否したりはしない。人間はそれを欲する、それを探し求めさえる。もしその意味が、苦しみの目的が示されたならば。これまで人類に蔓延していた呪いは、苦しみの無意味ということであつて、苦しみではなかつた。——そして禁欲的理想は人類に、一つの意味を提供したのである！それがこれまで唯一の意味であつた。何であれ一つの意味があるということは、何も意味がないよりはましである。(5-411 第三論文28)

「禁欲的理想は人類に、一つの意味を提供したのである！」とあるが、具体的に何を提供したのか。答えるとすればおそらく、禁欲的理想は「無を欲する」ことの有意味を「提供した」ということになろう。ところで、この『道徳の系譜学』第三論文の冒頭には、「禁

欲的理想は何を意味するのか」(5-339 第三論文1) という文の後には、人間には根本的に「空虚への恐怖」があつて、人間はこの「空虚」には耐えられない、それゆえ「まだしも無を欲する」と書かれている(同上)が、一読しただけでは非常に分かりにくい。だからニーチェは次のように言う。

人間の意志は、一つの目標を必要とする、——そしてそれは欲しないよりは、まだしも無を欲する。——諸君に私の言うことがわかるか？……私の言うことがわかつたか？……「ちつともわかりません！先生！——では初めからやり直すとしてよ。 (5-339 第三論文1)

この後ニーチェ先生の丁寧な説明のおかげで少しずつ分かつてくる。禁欲的理想とは「無(神)」(同上)である、と。その「無への意志」の裏には、「生への反感」「動物的なものへの憎悪」「物質的なものへの憎悪」「官能への嫌悪」「幸福と美への恐怖」(5-412 第三論文28) 等が隠れていることも分かつてくる。いずれにしても「人間は救われた」(5-411 第三論文28) のである。「何に向かつて、何のために、何によって欲したかはどうでもよい。意志そのものが救われたのである」(5-412 第三論文28)。そしてニーチェはこの論文の最後を次のように言つて締めくくる。「そこで、私が最初に言つたことを最後にもう一度繰り返すならばこうである——人

間は欲しないよりは、まだしも無を欲するのである。」(同上)

さて、意味が与えられた「苦しみ」は「負い目」の「補償」となり、自己懲罰や拷問の「苦しみ」は「最高度の快感」となる。ニーチェは負い目と苦しみとの親密な関係を次のように説いている。「いかにして苦しみは『負い目』の補償になりうるのか。苦しませることが最高度の快感を与えるからであり、被害者は損失ならびに損失にともなう不快を帳消しにするほどの異常な快楽を味わうからである」(5-300 第二論文6)。「やましい良心」はまさに「苦しませることの悦びから自己を苦しめ、好んで自己を分裂させる魂」(5-326 第二論文18)となったのである。今や「人々は苦痛を渴望した。『もっ』と苦痛を―『もっ』と苦痛を―」(5-390 第二論文20)

#### 使用テキスト

Friedrich Nietzsche : *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Einzelbänden* (KSA). Hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari. München 1988. 訳文については、木場深定訳『道徳の系譜』(岩波文庫版)、秋山英夫訳『道徳の系譜』(『ニーチェ全集』第三巻 第Ⅱ期 白水社 一九八三年 所収)、中山元訳『道徳の系譜学』(光文社古典新訳文庫)、木場深定訳『善悪の彼岸』(岩波文庫版)、手塚富雄訳『この人を見よ』(岩波文庫版)を参照した。本文中の引用には、巻数とページ数と著作名を記した(例えば、B-117『善悪の彼岸』195番)が、『道徳の系譜学』(この著書は序言と三つの論文から成る)に限っては、『5-253 序言6』とか『5-304 第二論文7』というふうに記した。なお、すべての引用文中の強調(傍点)は原文による。

#### 参考文献

- リチャード・ノーマン『道徳の哲学者たち 倫理学入門』塚崎智／石崎嘉彦／櫻川章監訳、ナカニシヤ出版、二〇〇一年
- Rüdiger Safranski : *Nietzsche. Biographie seines Denkens*. München und Wien 2000. (リニエライガー・ザフランクスキー『ニーチェ 考の伝記』山元允訳、法政大学出版局、二〇〇一年)
- 岡田紀子『ニーチェ私論 道化、詩人と自称した哲学者』法政大学出版局、二〇〇四年
- Lee Spinks, *Friedrich Nietzsche*, London : Routledge 2003. (リー・スピンクス『フリードリヒ・ニーチェ』大貫敦子／三島憲一訳、青土社、二〇〇六年)